

## ビブリオエッセー

産経新聞 令和2年(2020年)10月6日(火)

堺市西区 森瑞帆 (21)

【育ててくれて、ありがとう】

絵・文 葉祥明(サンマーク出版)

「ボク、ママにせひつたえたいことがあるんだ」。この絵本は、ハンディキャップのある子ども「ボク」の目線で書かれています。ハンディキャップをもって生まれた子どもたちはさまざまな困難や問題と向き合い、大変だと思われがちです。

ではハンディキャップのない人たちに困難や問題は無いのでしょうか。たくさんあると思います。著者は書きます、「ハンディキャップとは、障害のことではなく、生きる条件のこと」だと。

この絵本を子育てをしているご両親に読んでほしいのです。子どもを育てたこともない私が言つのも恐縮なのですが、子どもを育てるのが大変なことだということは分かります。ハンディキャップのある子どもに対して自分を責めてしまう人たちがいるという話を聞いたこともあります。もちろん「現実」を知らない私に何が言えるわけでもありませんが、「ボクはボク。ほかのみんなとすこしちがうところがある、ただそれだけさ。それがボクなんだ!」という言葉には逆に励まされます。

「ボクらはぐるしみにはまけない」「カラダ」という「うつわ」を使って「どんなじんせいをつくるか、どんなことができるか」、人は「じんせいのチャレンジャーなんだ!」。

考え方を少し変えるだけで感じ方も変わってきます。この絵本はそう教えてくれました。

ハンディキャップは「生きる条件」。著者はこう続けます。「決して非力でかわいそうな運命の犠牲者や被害者ではない」と。

私も改めて、両親への感謝の気持ちかわいてきました。同時に、いつか子どもが生まれた時、たくさんのお愛を注ぎたいと思いました。

それは「生きる条件」のこと

2020.10.6

※無断転載不可